様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：３４３１６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２９１８

研究課題名（和文）インド民主主義の源流―独立前後におけるアンベードカルの思想とデューイ―

研究課題名（英文）A Historical Origin of Indian Democracy: B. R. Ambedkar's Thought Around the Period of Independence and the Influence of John Dewey

研究代表者
長崎　暢子（Nagasaki, Nobuko）

龍谷大学・人間・科学・宗教総合研究センター・名誉教授

研究者番号：７００１２９７９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究ではアンベードカルの思想形成におけるJ.デューイーの影響を検討する。コロンビア大学に留学し、民主主義、教育、社会についてのデューイーの思想から大きな影響を受けたアンベードカルは、アソシエーションとそれにもとづく社会生活(associated life)というデューイーの概念を使って、カースト制度による「反社会的」（anti-social）な行為の蔓延は決してインド社会の基底から生まれるものではなく、歴史的に形成されたものにすぎないとし、そこから民主主義の課題を設定した。
　教育や政治における後進カーストおよびダリットの積極的な参加は、いまやインド民主主義の主要な特徴の一つとなっている。

研究成果の概要（英文）：This study attempts to establish a historical source of Indian democracy by examining the influence of John Dewey in the development of the thought of B. R. Ambedkar. After his study at Colombia University, Ambedkar repeatedly acknowledged his intellectual debts to Dewey's ideas on democracy, education and society. On the other hand, Ambedkar developed his own vision of Indian history and society, by which to set the agenda for Indian democracy. He applied Dewey's concept of associated living, to argue for the historical specificity of the caste system and condemn the anti-social behavior, especially against the Dalits. He asserted that such a social relationship was not inherent in India.
Although the development of associational life remained weak till long after his death, it is clear today that the increasingly active participation of backward castes and Dalits in the spheres of education and politics has become one of the main characteristics of Indian democracy.

研究分野：インド近現代史

キーワード：アンベードカル　デューイ　インド　インド独立　民主主義　教育　思想　アソシエーション

１．研究開始当初の背景

（１）インド民主主義は、中国など他のアジア諸国と比較して、誇るべき政治文化だとされているが、その源流については、J.ネルーによる「社会（民主）主義社会」建設に向かう国家構想、ガーンディーを中心とした民族運動などとの関連で議論されることが多かった。また、多くの指導者がイギリス留学を経験していたこともあり、宗主国だったイギリスの制度が参照されるのが普通であった。インドにおいて民主主義が、政治思想もしくは政治手法として、何時ごろ、誰によって、どこから導入され、広く使われるようになったのか、その回路についての研究は、ほとんどなされてこなかったのである。

（２）不可触民の出身であるアンベードカル（1891－1956 年）は、アメリカ合衆国のコロンビア大学に留学し、J.デューイーの下で民主主義について学んだ。とくに、デューイーの平等と社会正義の思想に強い影響を受けた。だが、現代インドの民主主義の潮流を、元不可触民の活動に関する研究と関連させながら論じた作品は、日本においては、まだ多くは見られない。むしろ、不可触民や少数民族などの状態をみるとき、インドの「政治的民主主義」は、格差社会の解消をもたらしていない、もしくは、そのスピードがあまりに遅い、とされることも多い。すなわち、現在のインドでも、政治的な民主主義は存在しても、社会的な意味での民主主義（social democracy）は、存在しないとする見方は、なかなか消えていないのである。

２．研究の目的

（１）本研究は、現代インドに民主主義という概念を導入した人物の一人である B.R.アンベードカルを取り上げ、かれの民主主義は、どこから、どのようにして、導入されたのか、また、その背景には、いかなる歴史的意味があったのか、を明らかにする。

（２）また、主として独立前後の時期におけるアンベードカルの民主主義思想の目標、内容を、この指導者に率いられた闘いの流れのなかに位置づけることによって、インドにおける民主主義概念をより正確に理解するための一助としたい。同時にインド近・現代史の理解を一層、深めることをも目的とする。

３．研究の方法

本研究ではアンベードカルとデューイーの具体的な関係について体系的に調べる。具体的には、（１）内外の関連文献のサーベイ、（２）史資料調査とその解釈、（３）成果の発信の３行程を、主要な作業とする。申請者は、これまでインド近現代史を専攻し、アンベードカルについても龍谷大学において研究会を開催してきた。本研究では、デューイーについても、アンベードカルへの影響という観点から研究を進める。関係図書館で周辺情報を含めた一次史資料の収集を行うとともに、研究協力者を中心とした研究会をいくつか開催する。成果については、報告、ワーキング・ペーパーの刊行などでの発表を続け、最終的にまとまった論考を英和両文で刊行することを目指す。

４．研究成果

（１）「文献のサーベイ」：ロンドン大学、アジア経済研究所、政策研究大学院大学の図書館において研究史を渉猟し、ある程度の体系的な知見を得た。初年度にはロンドン大学図書館でアンベードカル関係の文献を、第 2 年度にはアンベードカルとデューイーの思想的な関係についての研究を、そして第 3 年度には（アンベードカルに直接関係のない）デューイーの著作およびデューイーの研究書を、それぞれ検討した。デューイーのアジア（日本、中国）との関係、第二次大戦期の活動など、本研究のテーマと間接に触れ合うテーマも概観した。これらの作業をつうじ、当初の問題意識にはなかった、アンベードカルの思想の比較史的な特質についても考えることができた。

（２）「史資料収集」：検索ツールを用いながら、アンベードカルの著作集（Writings and Speeches）と Ambedkar PDF の関連個所を丹念にたどった。

研究会や国際シンポでは、篠田隆、田辺明生、舟橋健太、志賀美和子、Sugata Bose などとの交流がとくに有益であった。

（３）「成果の発信」：大きな枠組（インド民主主義の源流）については、長崎編『世界歴史大系　南アジア史 4』(山川出版社、近刊)で概要を述べた。とくに、独立前から進展した多様性尊重型の政治風土の形成のなかで、アンベードカルの運動が果たした役割に注目した。

本研究の具体的な内容は、2016 年に専修大学で報告したあと作業を進めたが、関連文献が膨大で、アプローチも多岐にわたるため、期間内での刊行にはいたらなかった。2018 年度中に見通しをつけたい。現在執筆中の論文（「アンベードカルにおける社会・教育・民主主義－デューイー思想の受容と新しいヴィジョンの構築」）では、予定していた教育と民主主義の二つのテーマにおけるデューイーからアンベードカルへの影響の検討に加え、先行研究（Mukherjee 2009）を踏まえ、アソシエーション論を核とするデューイーの社会論と、それを解釈したアンベードカル

のカースト社会論の二つの思想の関係を検討している。以下、その概要を紹介する。

アンベードカルは、アソシエーションとそれにもとづく社会生活（associated life, associated living）というデューイーの概念を使って、インドの歴史と社会の構造を解釈した。すなわち、カースト社会の階層間関係がデューイーの言うassociated livingという基本的な社会関係を否定するものになっているとし、近現代のカースト制度による差別、「反社会的」（anti-social）な行為の蔓延は、決してインド社会の基底から生まれるものではなく、むしろ歴史的に形成されたものにすぎないと論じた。

さらにアンベードカルは、このデューイーの発想をインド古代史の解釈にも適用した。そして、インドの伝統的な社会のなかには、異なる共同体の間での争いを調停し、多様性を尊重する思想が存在したことを示し、デューイーの社会構造論の影響の下に「カーストの絶滅」が可能だとした。「教育、運動、組織」を重視するアンベードカルの差別反対運動も、そのような社会構造の理解に裏打ちされたものである（Kumar 2015）。

さらに、anti-socialな行いへの執拗な注目のなかに、デューイーの視野を超えた、アンベードカル独自の民主主義論の構想が胚胎している、と考えられる（Vajpeyi 2012）。

アンベードカルの死後も、インドの政治はなかなかアソシエーションをベースとしたものにはならなかったが、現在では、教育や政治における後進カーストおよびダリットの積極的な参加は、インド民主主義の主要な特徴の一つとなっている。

＜引用文献＞

Mukherjee, Arun P. 2009, “B. R. Ambedakar, John Dewey and the Meaning of Democracy”, *New Literary History*, 40: 345-370.

Vajpeyi, Ananya 2102, *Righteous Republic: The Political Foundations of Modern India*, Cambridge, Mass: Harvard University Press.

Kumar, Aishwary 2015, *Radical Equality: Ambedkar, Gandhi and the Risk of Democracy,* Stanford: Stanford University Press.

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 長崎　暢子、「アンベードカルにおける社会・教育・民主主義—デューイー思想の受容と新しいヴィジョンの構築」、ディスカッション・ペーパー、査読なし、印刷中、2018 年

② 長崎　暢子、書評「笠井亮平『インド独立の志士「朝子」』」、北国新聞（5 月 28 日）、山梨日日新聞（5 月 29 日）、北日本新聞（5 月 29 日）、京都新聞（6 月 5 日）、神戸新聞（6 月 5 日）、山陽新聞（6 月 5 日）、徳島新聞(6 月 5 日)、愛媛新聞（6 月 5 日）、熊本日日新聞（6 月 5 日）、信濃毎日新聞（6 月 12 日）、査読なし、2016 年

〔学会発表〕（計３件）

① Nobuko Nagasaki, “B. R. Ambedkar, John Dewey and the Vision of Society”, International Seminar on ‘South Asia, Asia and Global History: A Dialogue with Professor Sugata Bose’（国際学会）, 2018.

② 長崎　暢子、「（コメント）第二次大戦とインド独立－加藤久子報告に寄せて」、2016 年度 RINDAS 第 1 回研究会、2016 年

③ 長崎　暢子、「アンベードカルにおける教育と民主主義—アンベードカル著作・講演集を手掛かりに—」、基盤研究 B「ローカルリーダーの登場と下層民の台頭からみる現代インド社会の変容」第 3 回研究会、2016 年

〔図書〕（計５件）

① 長崎　暢子、世界歴史大系『南アジア史４　近代・現代』長崎暢子編、山川出版社、印刷中、2018 年

② 長崎　暢子、「序章 南アジア近現代史の課題」、世界歴史大系『南アジア史４ 近代・現代』（長崎暢子編）、山川出版社、印刷中、2018 年

③ 長崎　暢子、「第 1 章 英領インドの成立と政治の変動」、世界歴史大系『南アジア史４ 近代・現代』（長崎暢子編）、山川出版社、印刷中、2018 年

④ 長崎　暢子、「第 4 章 独立インドへの道」、世界歴史大系『南アジア史４ 近代・現代』（長崎暢子編）、山川出版社、印刷中、2018 年

⑤ 長崎　暢子、「Ｆ機関」吉田裕・森武麿・伊東俊哉・高岡裕之編『アジア・太平洋戦争時点』、吉川弘文館、858 頁（64 頁）、2015 年

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
長崎　暢子（NAGASAKI, Nobuko）
龍谷大学・人間・科学・宗教総合研究センター・研究フェロー（名誉教授）
研究者番号：７００１２９７９

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：

(4)研究協力者
篠田　隆（SHINODA, Takashi）
大東文化大学・国際関係学部教授
研究者番号：２０１８７３７１

田辺　明生（TANABE, Akio）
東京大学・大学院総合文化研究科・教養学部・教授
研究者番号：３０２６２２１５

石井　一也（ISHII, Kazuya）
香川大学・法学部・教授
研究者番号：７０２９４７４１

舟橋　健太（FUNAHASHI, Kenta）
龍谷大学・社会学部・講師
研究者番号：９０５１０４８８

石坂　晋哉（ISHIZAKA, Shinya）
愛媛大学・法文学部・准教授
研究者番号：２０５２５０６８

Gyan Pandey (PANDEY, Gyan)
エモリー大学・歴史学部・教授

Sugata Bose (BOSE, Sugata)
ハーバード大学・歴史学部・教授